

第71回日本臨床眼科学会 イブニングセミナー11

光をつなぐ! ~シーズンVI~

糖尿病黄斑浮腫治療の新たな選択

日時 2017年10月13日(金) 17:10~18:10

会場 第9会場(東京国際フォーラム G701)



座長

小椋 祐一郎先生

名古屋市立大学大学院
医学研究科視覚科学 教授

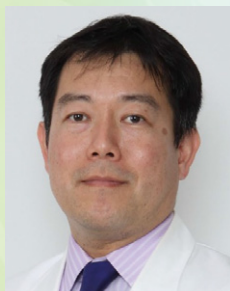
《座長のことば》

今年の春、我々眼科医にとって心強い味方が増えました。トリアムシノロンアセトニド(TA)製剤の新たな投与経路として、我々が待ち望んでいた【テノン嚢下投与】による「糖尿病黄斑浮腫の軽減」が追加承認されたのです。これにより、今までの外科的療法、薬物の硝子体内投与に加えて新しい薬物投与経路を手に入れることができました。本セミナーでは「糖尿病黄斑浮腫治療の新たな選択」と題して、“新顔”とも言えるTA製剤による糖尿病黄斑浮腫治療の解説を、お二人のエキスパートをお願いしております。三重大学の杉本昌彦先生には、糖尿病黄斑浮腫に対するステロイド治療の現状と未来について解説していただきます。そして東京医科大学八王子医療センターの志村雅彦先生には【テノン嚢下投与】を確実に、かつ正しく行うコツについてお話しいただきます。楽しい週末と週明けからの診療を迎えるのに最適な内容です。皆様のご来場をお待ちしております。

講演①

糖尿病黄斑浮腫

—温故知新のステロイド治療—



演者

杉本 昌彦先生

三重大学大学院医学系研究科
臨床医学系講座眼科学 講師

講演②

その投与方法、大丈夫ですか?

テノン嚢下投与



演者

志村 雅彦先生

東京医科大学八王子医療センター
眼科 教授

光をつなぐ! ~シーズンII~

糖尿病黄斑浮腫治療の新たな選択

第71回日本臨床眼科学会 イブニングセミナー11

日時 2017年10月13日(金) 17:10~18:10

会場 第9会場(東京国際フォーラム G701)

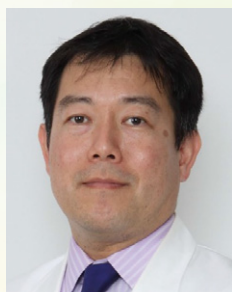


座長 小椋 祐一郎先生 名古屋市立大学大学院医学研究科視覚科学 教授

略歴

1980年	京都大学医学部卒業	1993年	京都大学医学部 講師
1981年	天理よろず相談所病院眼科	1995年	京都大学大学院医学研究科 助教授
1982年	神戸市立中央市民病院眼科	1997年	名古屋市立大学医学部 教授
1985年	イリノイ大学医学部眼科 留学	2002年	名古屋市立大学大学院医学研究科 教授
1986年	京都大学医学部 助手	2017年	名古屋市立大学病院 病院長
1989年	イリノイ大学医学部眼科 留学		現在に至る

講演① 糖尿病黄斑浮腫 —温故知新のステロイド治療—



演者 杉本 昌彦先生 三重大学大学院医学系研究科臨床医学系講座眼科学 講師

略歴

1996年	三重大学医学部 卒業	2007年	三重大学医学部眼科 講師
	三重大学医学部眼科学教室 入局	2008年	米国クリーブランドクリニック コール眼研究所
2003年	愛知県がんセンター 発がん制御研究部	2011年	三重大学医学部眼科 講師
2004年	三重大学大学院 修了		現在に至る
2005年	三重大学医学部眼科 助手		

抗血管内皮増殖因子(VEGF)薬は現在の糖尿病黄斑浮腫(DME)治療の第一選択であるが、すべてに有効というわけではない。ステロイド製剤は抗VEGF薬と別の経路で働くことが知られ、当初は抗VEGF薬のライバルであったが現在は良いサイドキックである。海外では徐放性ステロイド製剤がその役割を担っているが、本邦ではトリアムシノロンアセトニド(TA)製剤のテノン嚢下・硝子体注射が一般的である。とくに本年3月、TA製剤がテノン嚢下注射(STTA)に対し世界で初めて承認され、さらなる使用拡大が期待されている。本講演では、DMEに対するこれまでのステロイド治療を振り返り、現代におけるその立ち位置をしめす。

講演② その投与方法、大丈夫ですか? テノン嚢下投与



演者 志村 雅彦先生 東京医科大学八王子医療センター眼科 教授

略歴

1991年	東北大学医学部 卒業	2003年	東北大学医学部 講師
1995年	九州大学医学部生理学 国内留学		NTT東日本東北病院 眼科部長
1997年	東北大学大学院 卒業	2008年	東北大学医学部 臨床准教授
1998年	ミシガン大学ケロッグ眼研究所 留学	2012年	東京医科大学八王子医療センター 教授
			現在に至る

糖尿病黄斑浮腫に対する治療の第一選択はVEGF阻害薬となって久しい一方で、近年抗炎症ステロイドの局所投与の有効性が見直され始めている。糖尿病黄斑浮腫に対する浮腫軽減効果はVEGF阻害薬に勝るとも劣らない有効性を有する抗炎症ステロイドの眼内投与の欠点は、投与後の白内障進行と眼圧上昇であったが、これらの合併症を抑制する投与方法としてテノン嚢下投与がある。しかしながら、テノン嚢下投与は強膜側から網膜への浸潤という間接的な薬物動態であることや、薬剤投与を確認することが出来ないことから「選択しにくい治療法」であることも事実である。本セミナーでは抗炎症ステロイド・テノン嚢下投与の「正しい投与方法」と「正しくない投与方法」について、ビデオ映像も含めた実臨床でのコツと、その有効性や合併症の違いについて考えてみたい。